



フリーターと若者論の再解釈 : 「ほんもの」をめぐる一考察

寺崎, 正啓

(Citation)

鶴山論叢, 10:73*-89*

(Issue Date)

2010-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81002083>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81002083>



フリーターと若者論の再解釈

—「ほんもの」をめぐる一考察—

The reinterpretation of youth and Freeters

— An examination about “Authenticity” —

寺崎 正啓

Terasaki Masahiro

【キーワード】

フリーター、若者、ほんもの、アイデンティティ

【Key word】

Freeters, youth, Authenticity, identity

【要旨】

本稿の目的は、フリーターと今日の若者の労働観をめぐる解釈枠組みを更新し、新たな枠組みを提出することである。

よく知られているように、1990年代後半ごろからフリーターと呼ばれる非正規雇用の若者が急激に増大した。今日では、そのことに対して種々の研究の蓄積があるが、どちらかといえば、若者の心理的要因に焦点を当てたアプローチよりも若者の就業状況の分析に特化したベクトルが主流といえる。

無論そのような状況がおとずれたのは、前者からの切り口は往々にして「未成熟」「無責任」といった若者バッシングの単調な形態を取りがちであったためであるが、その結果として、若者と労働をめぐる問題は総じて経済的領域に限定されて論じられているくらいがある。しかしながら、「フリーター」という言葉の由来はそもそも「失業」という枠に括ることのできない、既存の労働観への見直しを含んだ概念だったはずであり、そのことを鑑みるに、労働との心理的関わりがどのように更新されてきたのか、という点を考察の対象にすることは重要である。

それゆえに、本稿では、労働観の変化というよりは劣化として一元的に捉えられがちであった若者バッシング論に目を向けて、「若者」がどのような存在として受け取られてきたのか、という点の見直しを図ることによって、労働観に対する認識の更新を目指す。

論述は、第一に、今日の若者と労働観の関わりについての簡単な素描、第二に、そこで

得た論点から、そもそも若者が議論の俎上に上ることが何を意味するのか、という点についての記述、第三に、そのような若者論が依拠していると考えられる理論的枠組みを特定した上で、それが抱える特徴と問題点についての考察、最後に、そのような問題点を更新し得ると本稿が考える、新たな理論的枠組みの提出、並びに今後の展望の順に行われる。

1. 問題設定

本稿の目的は、フリーターと今日の若者の労働観をめぐる解釈枠組みを更新し、新たな枠組みを提出することである。

よく知られているように、1990年代後半ごろからフリーターと呼ばれる非正規雇用の若者が急激に増大した。

そのことに対するアプローチとしては、種々の研究の蓄積があるが、大別すれば二つのベクトルに分かれるとあってよいだろう。つまり、若者の就業状況の分析に特化したベクトルと、若者それ自体の解明、すなわち心理的要因を注視したベクトルである。

しかしながら、後者のアプローチは往々にして「未成熟」「無責任」といった若者バッシングの単調な形態を取りがちであったため、前者からのアプローチによる多くの批判にさらされてきた。つまり、急速に広がる格差社会の実感を背景に、安直な若者批判はタブー視されている状況がある¹⁾。

その結果として、若者と労働をめぐる問題は総じて経済的領域に限定されて論じられているくらいがあるが、「フリーター」という言葉の由来はそもそも「失業」という枠に括ることのできない、既存の労働観へのアンチを含み「まじめに夢に向かってチャレンジしている若者」を表すものとして生まれた言葉であること(道下 二〇〇一)を鑑みると、やはり労働との心理的関わりがどのように更新されてきたのか、という点を考察の対象にすることは重要であるように思われる。

それゆえに、本稿では、労働観の変化というよりは劣化として一元的に捉えられがちであった若者バッシング論に目を向けて、「若者」がどのような存在として受け取られてきたのか、という点の見直しを図ることによって、労働観に対する認識の更新を目指そうと思う。

論述は、第一に、今日の若者と労働観の関わりについての簡単な素描、第二に、そこで得た論点から、そもそも若者が議論の俎上に上ることが何を意味するのか、という点についての記述、第三に、そのような若者論が依拠していると考え

られる理論的枠組みを特定した上での、それが抱える特徴と問題点についての考察、最後に、そのような問題点を更新し得ると本稿が考える、新たな理論的枠組みの提出、の順に行われる。

2. 若者と労働—フリーター論から見えるもの—

フリーターという言葉は1980年代後半にリクルートの求人雑誌『フロムエー』によって作られ広められたが、当初からそれらに対するスタンスとしてはいくつかの立場があった。しかしながら、最も容易に想起できるのは、しばしば若者バッシングの典型例としての『成熟できない若者たち』（町沢 一九九二）などの否定的な語り口であろう。

一方で、「怠け」とは違った切り口として注目されるのは「やりたいこと」にこだわる、「仕事と恋愛結婚したがっている」（長山 二〇〇三）労働観である（例えば、日本労働研究機構 二〇〇〇 a：二〇〇〇 b、下村 二〇〇〇：二〇〇二、小杉 二〇〇三、久木元 二〇〇三、亀山 二〇〇六、平塚 二〇〇六など）。

その特徴についていえば、まず、「やりたいこと」によって「良いフリーター」と「悪いフリーター」に分けて考える二分法が存在しており（下村 二〇〇二：八一—三）、「やりたいこと」がフリーターをめぐる正当化の言説としてある程度共有されていることがあげられる²⁾。

そして、久木元（前掲書）が示した分類に従って、「やりたいこと」が内包する意味内容をあげるならば、第一に、若者バッシング論では「根気がない」「無責任」といった語りが散見されるが、少なくともフリーターの語りを見る限り、「やりたいこと」を語る根拠とは、仕事を長く辞めずに続けるためには、仕事が自分の「やりたいこと」である必要がある、というもの³⁾第二に、「やりたいこと」は、現時点では明確に分かってはいなくても、十分に時間をかけてでも、発見するべきだ、という前提がある程度共有されているということ⁴⁾、第三に、「やりたいこと」には、自分の内部を探ることによって出会うことができるだろうと想定していることである⁵⁾。

つまり、「やりたいこと」にこだわる労働観は、①仕事に対して、できれば一生でもコミットメントしておこうとするために、「やりたいこと」である必要があるということ、②「やりたいこと」は、当面の義務的・妥協的な就職をするよりも優先させてでも見つけるべきものだという認識があるということ、そして、③「やりたいこと」は自分の内部を探っていくことによってきっと出会えるはず

であり、往々にして「自分探し」のプロセスと「やりたいこと」を探すプロセスはほぼ重なっているという特徴を持っているということへと読み替えることができるだろう。さらに加えれば、「私」を規定する条件は「やりたいこと」であり、「やりたいこと」にこだわることはとりもなおさず、「私」にこだわるというように言い換えることができるように思われる。

そうであるとするならば、今日の若者バッシングと労働をめぐる問題は、「大人」と「若者」の、いうなれば「私」をめぐるギャップの問題として顕在化しているように考えられるわけである。

埋められないギャップがあるということは、必然的帰結として「やりたいこと」を追い求める労働観は、翻って若者の「未成熟」へと繋がる論点になりうる可能性を抱えているということでもある。つまり、これまでであれば、学校を卒業するまでに自分の進むべき道は決めておくのが通例であったのにもかかわらず、今日の若者はなぜ「決められない」のか（長山 前掲書）、といった論調である。

確かに、自ら決定し、自立していくということは「成熟」の条件として最も一般的といっても良いもののように思われる。そのような基準に照らせば、やはりフリーターに象徴されるような「やりたいこと」にこだわる若者の姿は、「大人」になれない若者たちという構図が出来上がる。

しかしながら、そのような図式による理解も、おそらくは小さくない欠陥を抱えている。次節では、主に1970年代以降のアイデンティティ拡散にまつわる若者像の系譜をたどりながら、そのような解釈枠組みの限界を探っていきたい。

3. 青年論前夜一若者が「発見」されるということー

「若者」が議論の俎上に上るためには、当然のことながら子ども期と大人期の間に、区別すべき年齢層がある、という明確な認識が必要である。しかしながら、Ph アリエスのいうように、工業化以前のヨーロッパ社会ではそのような区別は設けておらず、当時の人々は「青年期」と呼ばれる段階をまったく認めていなかった（Ariès 1960＝一九八〇）。

J.J. ルソーが『エミール』（Rousseau 1762＝一九六二）で、少年期と成人期の間に青年期を導入したことは良く知られているが、それが貴族階級を越えてある一定の広がりを持ち始めたのは19世紀のことである。

その後、19世紀末から20世紀にかけての一層の産業化の進展を受けて、それらを支える技術・能力を養成する必要から、社会へ出るための準備期間が延長さ

れ、「青年期」が広範に浸透するに至る。

そして、青年及び青年にまつわる現象が「問題」として社会的に認知され、本格的に学問の俎上にのりはじめたのが、先進各国を中心として世界規模で巻き起こった若者の「異議申し立て」としての学生運動の影響が背景にある1950年代後半から1970年代ごろである。つまり、この時期にいたって大規模に現れてきた、大人への移行期においてかつてないほど社会に対してプロテストする若者たちに対して、学問的対応、説明が要請されるようになり、「問題」の対象としての「若者」が発見されたということが出来る。そのような意味で、(明確な区分は難しいが)1970年代を前後した時期は転換点であった。

それでは、日本での若者論の状況はどのようなものであっただろうか。社会学における青年論の取り組みを知る上では、塩原(一九七一)が参考になる。それによれば、当時の青年についての論議を受けて提出された三つの青年論への視角、①労働の問題としての青年論、または階級論的な青年論、②文化の問題としての青年論、または世代論的な青年論、③政治の問題としての青年論、または時代の問題としての青年論が考察の俎上にのせられている。

①は、1960年代当時現実味を帯びていた労働―階級闘争における青年像をとらえる視角であり、そこでは、青年は将来的に労働階級の一翼を担う存在であり、共同して労働階級の敵に当たるべき同志として扱われていたことがわかる。つまり、労働階級内部においては、世代間対立などはさほど意識されず、批判されるとしても急進的學生運動を担う学生達の観念性などに限られていた。

②では、今日の青年世代は成熟の早まりと職業的自立の延期によって「引き伸ばされた青春」のなかにあり、このような長期の未決期間を通じて独自のユース・カルチャーを形成して、年長世代との文化的不連続感を経験しているとされる。それゆえに、この視角では、基本的に「逸脱する青年の再統合、ラディカルに秩序にそむかない反抗の承認」(同書：三)という考え方が存在する。つまり、この視角も、青年の内在的理解を目指すものではなく、大人の側、社会の側からどのように秩序に組み込むか、という外在的な問題把握に終始している。

③は、青年たちの特徴を豊かな社会で育った若者とした上で、彼らは物質的な搾取よりも観念的に現れる抑圧と疎外を鋭敏に感じ取るとし、一切の権威に反抗する志向のなかに自己変革を含めた価値変革がラディカルに主張されているとする、異議申し立てをする青年の政治的な立場を表明する視角となっている。

これらを眺めると、三つの類型はいずれも青年のあるべき姿を示すものであったり、イデオロギー的立場の表明であったりするものだった。つまり、60年代～

70年代ごろの青年論は彼らについての内在的「理解」というよりも、どちらかというと言青年問題への現実対処的な性格を持っており、近年の若者バッシング論に見られるような世代間断絶はそれほど見られず、異文化としての若者が発見される前夜の「青年論」であった、という言い方ができる。

4. アイデンティティ拡散と若者像

しかし、(特に象徴的には) 1972年2月の連合赤軍事件などによって決定的挫折を突きつけられた学生運動の熱は次第にそのほてりを冷まし始め、ラディカルな異議申し立ては若者たちの「しらけ」「アバシー」の傾向へと取って代わられるようになる。つまり、ここにいたって今日の「決められない」若者へと通じる若者像が語られるような潮流へと通じてくるわけである。

そのような若者をとらえるための理論枠組みとして、圧倒的な影響力をもってあらわれてきた説明装置が、発達論的なパースペクティブから青年心理を論じたE.H. エリクソンの「アイデンティティ」の概念である。アイデンティティ概念は、1960年代後半から70年代にかけての青年問題を解明する上で、何よりも「感受概念」、すなわち人々の関心を問題の所在へと導く概念として注目された(草津一九八七)。

「アイデンティティ」とは、「自我同一性」と訳され、「自我が特定の社会的現実の枠組みのなかで定義されている自我 a sense of ego へと発達しつつある」感覚(Erikson 1959=一九七三:一〇)を意味するものであり、彼のライフサイクル論の一部を構成するものとして提出されている概念である。

エリクソンは、そのライフサイクル論において、従来の発達理論の射程を拡張し、幼児期から老人期にいたる人間発達を一貫した枠組みで捉えようとした。この理論は、自我がその発達段階ごとのステージにおいて直面しなければならない発達課題とともに現れる「危機」を乗り越えながら、徐々に機能的な分化と統合を達成することを示したもののだが、その中で特に重要とされた段階が、青年期における「同一性対同一性拡散」の段階である。

青年は、この時期に一時的に「未帰属」の状態になることで、さまざまな試行錯誤を通じて自己の社会的役割の統合を試みるが、この時期に首尾よく統合が達成されない場合は、同一性拡散という病理的状态に陥るとされる。そして、ここで獲得された同一性は後の成人期における三つの段階、「親密さと隔たり対自己吸収」「生殖性対停滞」「完全性対絶望と嫌悪」においても影響を与え続けるので

ある。それゆえに、エリクソンのアイデンティティ論においては、後の人生を左右する非常に重要な時期として「モラトリアム」が設定された。

しかしながら、学生運動終結以後の若者像は、主としてそれとは逆に、「モラトリアム」の否定的意味合いから若者を解釈する言説によって特徴付けられることになる。

学生紛争のほてりが去った後に目立って注目され始めたのは、若者たちの「しらけ」であった。大学では、いつまでも卒業しようとし、長期留年学生の集団が話題を集めた（石川 一九七七や笠原 一九七七：一九八四などを参照）。そして、そのような下地のもと現れたのが小此木の「モラトリアム人間」論である（小此木 一九七八）。

小此木によれば、エリクソンの理論においては、早急にアイデンティティを統合すべき時期として論じられたモラトリアムを生きる人間は、彼らを寛容に受け止める豊かな産業社会の中で半人前から抜け出さなければならないという義務的な感覚を喪失し、「…どんな社会的局面でも当事者意識がなかったり、当事者になることを嫌い、それぞれの場所で、できるだけお客様でいることを望む心理的傾向」を持つ「モラトリアム人間」（同書：九）へと変貌した。

彼は、「モラトリアム人間」の特徴を「万能感」「無意欲・しらけ」「自我分裂」等の言葉で表現し、若者に対して痛烈な批判を浴びせかけた（同書：二三―七）。つまり、小此木にとっては、彼らは、自尊心ばかりを肥大させ、たいしたことを成し遂げる気力も能力もないにもかかわらず、戦後以降日本が作り上げてきた産業社会の豊かさに寄生しながら、日々をお客様気分で送る極めて甘ったれた輩に他ならない。今日のフリーターを初めとする若者バッシングで現れる「無責任」「甘え」「未成熟」等々といった論調の源泉は基本的にこの地点に求めることができると考えてよさそうである。

また、モラトリアムの永続化という同様の主題では、その時々のも最も有力なものへの変身を重ね、一定のアイデンティティを有さない若者像を描いたR.J. リフトンの「プロテウスの人間」（Lifton, 1967＝一九七一）があるが、これに比べると、日本社会に特有の「甘え」の構造を特徴として加えた点が異なっているといえるだろう。

そして、そのような若者像が浸透するにつれ、内容はそのままに言葉だけが更新されているかのような若者像が多く語られるようになる（例えば「ピーター・パン・シンドローム」（Kiley 1983＝一九八四）や「青い鳥症候群」（清水 一九八三）など）。

ともかく、本節を総括して言えば、問題としての「若者」は「アイデンティティ」を確立できないある種の「病理」として「発見」され、そのことは翻って考えるに、「アイデンティティ」を確立することが「大人」の条件としてカウントされていた、と見ることができそうだとすることである。

5. 自分を探す不透明な「私」について —発達論的図式が見落としていたもの—

しかし1980年代へ進むと、学生運動のなごりは失われ、変わって現れたバブル景気へと続く高度消費社会の空気のなかで、どちらかという消費文化の担い手となる若者像こそが観察の対象とされるようになり、アイデンティティ論を下地にした若者論は新鮮味を失っていく。というよりも、小此木が評したように、消費社会の熱狂の中で若者に限らず「大人」になることの当為は失われ、「モラトリアム人間」であることが、取り立てて特殊なこととはいえなくなっていくのである。

しかし、いったんは忘れられたかのように見えた「モラトリアム」論も1990年代中ごろあたりから再び頭をもたげてくることになる。「いじめ」、「ひきこもり」、「キレる17歳」、「殺してみたかった」等、いわゆる「心の闇」に根ざしていると目された一連の社会問題群の噴出とともに、「若者」の姿が見えないという実感が溢れてくる。

その不透明感は「大人」として当然のモラルを有さない、「大人になれない」若者群という言葉によって括られ、バッシングの矛先が向けられた。そのような「ワケの分からぬもの」としての若者像を煽り立てる一連の論調が、同時期に増加しつつあったフリーター論へと適用されることによって、世間の耳目を集めることには成功したものの、前節で見たように、「モラトリアム」の否定的印象のみが受け継がれた一面的な解釈を作り上げたわけである。それゆえに、今日の若者の労働観をめぐる議論は、一元的な結論しか導くことができなかった。

それでは、「若者」の姿が見えなくなったのは、観察者側の「大人」だけだったのだろうか。そうではなく、当の「若者」ですら自分自身の姿は不透明で「ワケの分からぬ」存在だったことはおそらく否定できない。1997年に起こった神戸連続児童殺傷事件において大きく報道された、「透明な存在の僕」という表現は特殊だとしても、やはり1990年代の中ごろから目立って増加し始めた「自分探し」の傾向はそのことを雄弁に物語っているように見える。

「大人」と対比した上で「若者」の意味するところが鮮明になるのだとしたら、社会全体が「モラトリウム」気質として語られる状況においては、あるべき「若者」像もはっきりしない。無論、エリクソンの語る青年期とは、試行錯誤によって、自らによって立つべき「アイデンティティ」を発見するための期間であるわけだが、拡散された「大人」像を前に自らアイデンティティを構築し獲得することはそこまで容易なことなのか。あるいは（エリクソン自身も厳密に年齢によって区分しているわけではないが）青年期のうちに発見することは可能なのか。そのように考えていくと、発達論的なパースペクティブはある種の楽観的な予定調和を想定することによって成立する理論であるように思われる。

そうであるとなると、1970年代以降青年論の下地に据えられ、アプリオリに受け入れられてきた図式的発達段階論⁶⁾を前提に、フリーターを中心とする若者たちを論じることが必ずしも適当であるとはいえない。そのような姿勢は少なくとも今日のような「大人になる」ことの内実が必ずしも自明のものとして共有することができない状況では、限界があるように思われるのである。

それゆえに、単に「未決」状態にとどまっている「モラトリウム」としてフリーターを断罪する思考枠組みからはいったん距離をとって、新たな枠組みを設定しなければならないように思われるのである。

6. 「本当の自分」という論点

—「誠実」と「ほんもの」という枠組みから—

そこで本節では、「やりたいこと」という労働観においても、90年代若者論でも問題にされた、探してでも見つけなければならない「本当の私」について新たな志向枠組みを提出するとともに、今日の状況における若者と「自己」、および労働について考察したい。

ところで、フリーター及び若者をめぐって現れる「本当の私」というフレーズについては、主に二つの立場がある。それは、第1節でも触れたように、一つには、これまでであれば、学校を卒業するまでに自分の進むべき道は決めておくのが通例であったのが、今日の若者はなぜ「決められない」のか（長山 前掲書）といった語り口、そしてもう一つは、「若者よ、丁稚奉公から始めよう。『自分探し』を夢想する前にまず『手に職』をつけよ」（荻谷 二〇〇三）や、「仕事をしなければ、自分は見つからない」（三浦 二〇〇五）といったフレーズからうかがえる、「本当の自分」というものは無理に探すほどのことはないのであって、そ

ここまでしてこだわる「自分らしさ」に一体何の意味があるのか、という立場である。

無論両者は、フリーターを中心とした、働くことの手前で足踏みする若者への批判・違和感を抱いていることについては共通しているのだが、見比べてみると、少なくとも1、本当の私が未だ見つかっていないというのは、成熟レベルが低いのではないのか、2、取り立てて「本当の私」を見つける必要などないであり、それにこだわる若者は理解しがたい存在である、ということが前提視されているように見える。

翻って考えてみれば、これは不自然なことである。「本当の私」という考えに対するスタンスとしては、矛盾しているように見えるにもかかわらず、なぜ両者は同様の文脈で若者批判として成立するのか。一方では早急に見つけるべきものとして真に進むべき道を持つ「私」が想定されており、他方では、義務や仕事を果たす中で次第に見つかるものであるから、そこまでこだわる必要はないという。

これに対しては、ひとつの仮説を立ててみようと思う。つまり、若者のいう「社会の歯車にはなりたくない」や「会社の奴隷には～」といった典型的なフレーズからは、「本当の私」は、義務的な役割から離れたところにある存在として想定されているといっても良いと思われるが、若者に対して批判を繰り出すものたちにとっては、「本当の私」と義務に対して忠実である私という存在が、基本的に重なっていたのではないだろうか、ということである。

そのような仮説を検証するために、ここでいわれている「本当の自分」とはそもそもどのような文脈のもと現れてきたのかという点に着目したい。ここで参照するのは、L.トリリング（Trilling 1972＝一九七六）の「誠実」と「ほんもの」についての議論である。

トリリングの議論を参照することによって、「本当の私」について抱かれていた想定を更新していこうと思う。それは、「本当の私」とは実体的に存在するのではなく、「誠実」すなわち役割的な自我から逆説的に現れてくるベクトルとして理解すべきものであるということである。そしてそこから導きうる帰結として、「ほんもの」を求めるスタンスが往々にしてベクトルの宙吊りになる結末が必然的なものとして説明されうる解釈枠組みになると思われる点を強調したい。

L.トリリングは近代的自我の特徴を「ほんもの」（authenticity）の自我という概念と「誠実」（sincerity）な自我という概念を対比する中から描き出している。

「誠実」とは、建前（これは、「人間一般の最善の自我」が想定されている）と

実際の感情が一致することを意味するが、この一致することに価値を置くということが、一つの抽象概念としての「社会」が現れつつあった時期を境に美德として語られるようになった（Trilling 1972＝一九七六：九）⁷⁾。

それは自らの「役割」を意識して主体的に振舞う近代的「個人」が生まれたということでもある。そこから、建前としての「役割」を誠実に演じることが誠実だとして美德とされるようになった。それゆえ、誠実な人間の役を誠実に演技するとき、我々の「誠実」は「ほんもの」ではない（同書：二〇）。

さらにトリリングは、19世紀イギリスにおける職業人としての道徳的典型を示しながら、仕事と「誠実」な道徳的個人の融合について説明する。「誠実」であるということは、「なんらかの没個性的目的に向って自分の全力を間断なく集中し、自我というものを一般の善のために犠牲にすること」である。それゆえに、ここにいたって、「仕事こそはわたし達を健全にして全一、自尊に価するもの」として認知されるようになった（同書：一五三～四）。

しばしばフリーターが定職についていないことに対して、道徳的文脈から批判が生じるが、それは、フリーターがここでいう「誠実」という美德に悖る存在として捉えられるためだと考えられる。

それでは、「ほんもの」とはどのような文脈で理解することができるのだろうか。トリリングは「ほんもの」について必ずしも明瞭に定義しているわけではないが、「一切の演出を超えた内部」として捉えている。そのことは何を意味するのだろうか。「誠実」と「ほんもの」が重複しうる条件について述べられた箇所から類推していきたい。

トリリングは「誠実」と「ほんもの」は必ずしも離反しているわけではなく、重なることもあるということについて述べる。すなわち、「自分の階級的状況、それがいかなるものであれ、それを自分の与えられた必然的な条件であるとして是認している人間こそ…誠実でかつほんものでもある、ほんものだからこそ誠実でもある」（同書：一五八）。つまり、階級によって投げかけられる、演じべき理想的な自我が必然的な条件として受け取ることができる場合において、「誠実」は「ほんもの」に重なりうると捉えているわけである。ということは、逆説的に理解すれば、階級の頑強さが失われるとするならば、「ほんもの」の自我はとりわけ「誠実」な自我から離反することになる。すなわち、役割を投げかける社会が賈物であれば、「誠実」な自我もまた「賈物」である。

トリリングが具体的下地として念頭に置いたのは、19世紀イギリスにおける「階級」であるが、そもそもこの著作を通じて論じようとしているのは、近代的

自我そのものである。そうであるとするならば、戦後以降の日本の状況へと置き換えて読むことも可能であるはずである。

それでは、フリーターと若者の労働観に寄せて「誠実」と「ほんもの」を捉えなおすならば、どのような読み替えが可能だろうか。まず、ここで言う「階級」については、戦後以降日本の特徴とされてきた「中流意識」が根ざすところの「中流」として読み替えていきたい。そうすると、「階級」の制度的頑強さが喪失されつつある点については、流動性、不安定性が所与のものとなり始めた1990年代後半から今日に至る状況として、さらに、「中流」である労働者階級を精神面で支えた「大きな物語の喪失」については、オイルショックなどにより生産力神話にかげりが見え始めた1970年代中盤以降から今日に続く状況として読み替えることができるだろう。

つまり、制度面においては、中流であることを保障した雇用制度の安定性によって、精神面においては、社会と人間は進歩・発展するものだという信念などを特徴とする近代の抱える「大きな物語」によって「誠実」な自我は補完されてきたのではないかと考えることができるのである。

もう一点触れておきたいことがある。それは、トリリングの「誠実」と「ほんもの」を交差させながら描く議論の運び方からは、少なくとも近代黎明期以降、歴史的に両者を美徳として語りうる余地があったということである。

特にC.テイラーは、近代初頭に端を発する「ほんもの」という理想の追求が、今日に至ってようやく到達しつつある、外部からの強制ではない真理へといたる道程となりうる倫理であると高く評価している。それによれば、今日蔓延している「ミーイズム」やナルシシズムが、「ほんもの」という倫理から相対主義が支配する主観主義へと滑り落ちてしまった文化であるとした上で、それを警戒しながらも、なお、ときに社会のルール、場合によっては道徳への反抗も含まれる「ほんもの」という倫理を追求すべきであるとしている（Taylor 1991=二〇〇四）⁸⁾。

つまり、「社会」と「個人」の対立が次第に明確に意識され始めた時期から、避けがたく「誠実」と「ほんもの」という二つの極の間の揺れ動きの種が存在した。これは、近代的自我がその黎明期から宿命的に抱えている振幅である、と言うこともできる。

会社に終身雇用として雇われ、役割を遂行することを「誠実」な自我になぞらえて理解したとき、正社員かフリーターか、という基準よりも「やりたいこと」という基準に沿って職業選択に臨もうとする若者は、言い換えれば「誠実」と「ほんもの」のギャップの拡大とともに、その間を行き来する典型例として受け取る

ことができるのである。

そうすると、前節で論じたような図式的発達段階論を前提にする立場は、ここでの解釈枠組みに照らしたとき、「誠実」と「ほんもの」のずれについて必ずしもことさらに自覚的である必要のなかった社会における解釈枠組みであるということになるだろう。そして、そのようなギャップに対して常に再帰的に臨まざるをえない今日の状況においては、本節で論じた「誠実」と「ほんもの」という二つの極の間の振れ幅において、「自分探し」という傾向を考察しなければならないように思われるのである。

つまり、殉ずるべき社会の役割が「贗物」であるかもしれないと感じられたとき、ことさらに「ほんもの」へのベクトルが膨張する。それゆえに、「ほんもの」とは、必ずしも実体が想定されるものではなく、ベクトルとして「誠実」から逆説的に理解されるべきものであるように思われるのである。

7. 結語

さて、本稿では、労働観の変化というよりは劣化として一元的に捉えられがちであった若者バッシング論に目を向けて、「若者」がどのような存在として受け取られてきたのか、という点の見直しを図ることによって、労働観に対する認識の更新を目指してきたわけだが、ここまでの議論を振り返れば、最初に、フリーターの語る「やりたいこと」は、納得できる形での「私」でいられるために口にするフレーズであることが明らかにされ、次いで、そのような傾向を有している若者を「モラトリアム」という観点から一元的に解釈してしまうことは、必然的に成長過程からの逸脱／適応という二者択一の図式から出ることができないことが明らかにされた。

さらに、それらを踏まえたうえで、そのような労働観の生まれうる心理的な論理構造はどのような文脈においてか、という点を「誠実」—「ほんもの」という新たな解釈枠組みから考察したところ、図式的発達段階論を前提にすることが困難な今日の状況においては、「ほんもの」は義務としての「誠実」の喪失から逆説的に現れてきうる存在として定位することが可能になった。

それでは、そこから先に進んで論ずるべきテーマにはどのような観点がありうるのか。本稿は、「大人」「若者」「労働」「自己」といった概念に対する思考の枠組みを提示することに主眼を置いたため、具体的レベルの詳細な議論はやや大雑把だった。具体的レベルで掘り下げることによって、より議論が濃密になりうる

観点をいくつかあげることで、ひとまず本稿の結語としたい。

まず、前項の末尾でもあげたように、殉ずるべき社会の役割が「贖物」であるかもしれないと感じられる条件としては、制度的レベルでの検証と、精神的レベルでの詳細な検証が必要になるだろう。

前者に関しては、戦後以降続いてきた「日本の経営」の崩壊がもたらす、学校あるいは就職先での半永続的な「役割」が制度的レベルで（これは「物理的」という言葉でも良い感覚すらある）そもそも見込むことができなくなりつつあるプロセスの記述が必要だろう。

そして後者に関しては、やや大きな枠組みになるが、M. ウェーバーが示したような、近代資本主義が発展するために非常に重要となった労働の意義付けが疑われてきたプロセスについて、特に「大きな物語」が喪失されつつあるとしたポスト・モダニズムとの関連における「自己」もしくは「アイデンティティ」に関する議論が必要だろう。

さらに、今日の若者が掲げる「やりたいこと」という言葉は、「ほんもの」を求めるベクトルの先に想定されているキーワードであると考えられることができるが、なぜ「ほんもの」を規定する語彙が「やりたいこと」といった欲望もしくは個人的欲求を意味する言葉によって表現されるのかについても、掘り下げるべき余地が残されているように思われる。これは、主として生産的行為とは対極のものとして理解される、各々の欲望充足を最大化しようとすることに対して寛容な（というよりもむしろ、それを促進する）消費社会との関連でより深めることが可能になるのではないのか。

そして最後に、「自分探し」のプロセスがしばしば着地点を持たず、「ほんもの」を求めようとするベクトルのみが宙吊りになり、結果としてフリーターという地位にとどまり続けざるを得なくなるという点をどのように捉えればよいのか、という問いが残っている。つまり、自らが自らによって立つとは、近代以降の個人観が前提としてきたテーゼだが、果たして「ほんもの」であろうとする行為自体は「ほんもの」であるのか。そもそも社会に「本当の私」は存在しうるのか。

「ほんもの」であろうとするスタンスに冷笑的なシニシズムでもって対応する限りにおいてはそのような問いからも自由なわけだが、それはともかくとして、いささか問いの形式が根本的で古典的なものとなりすぎる感はあるものの、フリーターをめぐる問われていることとは、そのようなものであると思うのである。

【注】

- 1) 2000年以降の若者にまつわる労働論はそうであったが、特に（本田・内藤・後藤 二〇〇六）でその立場が鮮明になった。
- 2) 具体的記述としては、「二通りあると思うんですよ、フリーターでも。やることなくてやっている子と、やりたいことがあってバイトしている、何かのためにバイト、フリーターじゃなきゃいけない人、やることが何も見つからなくてフリーターでしょうがなくやっている人と。」（19歳・男性・高卒、日本労働研究機構 二〇〇〇：三二四）、「悪いフリーターっていうのは、いい意味で、いや、悪い意味で、今のことしか考えてないっていう。…良いフリーターっていうのはなんていうんだろう、現実的に自分のやりたいことを計画している人。」（20歳・女性・大学中退：二一四）など。
- 3) 具体的記述としては、「やっぱりやりたくない仕事って、続けられないと思うんですよ。…いずれやめるという感覚で就職はやっぱりしたくないんで、だったらフリーターで…。」（21歳・女・各種学校修了：四三〇）「私自身がやりたいことがないのに無理やりやらせても、結局続かないのは見えているというので。」（22歳・女・短大中退：四九三）「仕事にしろなんにしろ、すごく大事なことというのは、楽しむということだと思うんですよ。楽しいからこそ長く続けていけるんだろし…。」（29歳・男・高卒：四七二）「自分が好きなことを見つけて仕事に没頭したいんです。」（23歳・女・短大中退：四四二）など。
- 4) 具体的記述としては、「目的もなしにやっているフリーターっていると思いますけど、それも一つのあり方だと思いますね。フリーターをやりながら自分のやりたいことを見つける準備期間というふうにもとらえられると思います。」（24歳・男・大卒：一三七）「フリーターっていわれてても、たぶんちゃんとした目的があってやってると思うんで、自分はそんな偏見的なイメージはないです。目的がなくても、…やってるうちに目的とか出てくるじゃないですか。そっから頑張れば良いんじゃないですかね。」（20歳・男・専門学校在学中：五二八）「自分の好きなふうに生きたい。好きなふうについていうか、まだつかまらないかもしれない、自分のやりたいことが。つかまったらたぶん一生懸命やるけど、何やりたいかわからないので、フリーターでいるんだと思います。」（24歳・女・大卒：二四七）「今、自分が何をしたいかわからないので、下手に無理やり決めちゃうのも無理があると思うんで、いろいろと考えて、就職するかもしれないですし、まだしばらくそういうちゃんとした就職とかは出来なそうだと思うんですけど。」（18歳・女・高卒：一七三）など。
- 5) 具体的記述としては、「今は23なので26とかそれぐらいまでにはちゃんと考えがまとまって、将来どうしたいとかちゃんと考えられるようになっていたいと思うんです。」（23歳・女・短大中退：四四二）「やっぱり、自分が年をとって行って、またやりたいことが見つかるかもしれないじゃないですか。私は、人に流されるんじゃないで、自分のやりたいことをそのままやっていきたいんで、…あんまり先のことは、私は考えないですよ。…今一番やりたいことをやれば良いという感じです。」（21歳・女・

高卒：二九二―三）「…自分がやりたいって思ったことなら、何でもできるな、これから探してどんどんやっていけるなって思っていたので、そのときによっていうふうに考えていたので。特には、こう、焦って探すようなことはなかったですね、やりたいことを。」（21歳・女・高卒：三六四）など。

- 6) そのことを日本の状況に当てはめれば、いうまでもなく、とりわけ戦後日本では安定的に存在してきた学卒―就職の連続した一元的なライフコースに身をゆだねることを意味する。
- 7) これは裏を返せば、殉ずるべき理想的な自我が共有されていることも意味している。また、トリリングはこの時期を16世紀後葉から17世紀初頭に見ているが、後述する「誠実」と「ほんもの」対立の起こりについては、19世紀末頃を想定している（同書：第一章、第五章）。これは、次第に「社会」と「個人」の対立が意識され始めた時期、そして、さらに進んで、対象としての社会が「発見」され、学としての社会学の成立時期に対応していると見ることもできるだろう。ただし、本稿のここでの関心はあくまで、「近代的自己」が根本的に持つ論理構造に「誠実」と「ほんもの」の対立があるということを確認することにあり、「近代」の具体的時期の厳密な特定に関する議論までは入り込まないでおく。
- 8) しかしながら、トリリングとテイラーの「ほんもの」に対する見方はかなり異なっている。「狂気」をも「ほんもの」の一例として捉え（それゆえに、「ほんもの」と呼ばれているもの、といってよいかもしれない）、必ずしも「ほんもの」の追求に全面的な価値を認めていないトリリングに対して、テイラーは「ほんもの」は倫理として追求すべきであるが、だからこそ価値あるべき「ほんもの」の定義にこそ心血を注がなければならないとしている。

文献

- ・ Ariès, P1960 : *L'enfant et la vie familiale sous l'Ancien Régime* (=一九八〇、杉山光信、杉山恵美子訳『「子供」の誕生：アンシャン・レジーム期の子供と家族生活』みすず書房)
- ・ Erikson, E. H 1959. : *Identity and the Life Cycle* (=一九七三、小此木啓吾訳編『自我同一性：アイデンティティとライフ・サイクル』誠信書房)
- ・ 平塚眞樹 二〇〇六：「若者の職業・就業意識とその社会的作用 異化する意識と回帰する意識」乾彰夫編著『不安定を生きる若者達 日英比較 フリーター・ニート・失業』大月書店
- ・ 本田由紀・内藤朝雄・後藤和智 二〇〇六：『「ニート」って言うな！』光文社
- ・ 石井完一郎 一九七九：『青年の生と死との間：出会いへの軌跡から』弘文堂
- ・ 亀山俊朗 二〇〇六：「フリーターの労働観——若者の労働観は未成熟か」太郎丸博編『フリーターとニートの社会学』世界思想社
- ・ 苅谷剛彦 二〇〇三：「若者よ、丁稚奉公から始めよう 「自分探し」を夢想する前にまず「手に職」をつけよ」『文芸春秋』81(6)、pp359-365

- ・笠原嘉 一九七七：『青年期：精神病理学から』中央公論社
- ・—— 一九八四：『アパシー・シンドローム：高学歴社会の青年心理』岩波書店
- ・Kiley, D. 1983 : *The Peter Pan Syndrome* (＝一九八四、小此木啓吾訳『ピーター・パン・シンドローム：なぜ、彼らは大人になれないのか』祥伝社)
- ・小杉礼子 二〇〇三：『フリーターという生き方』勁草書房
- ・久木元真吾 二〇〇三：「『やりたいこと』という論理——フリーターの語りとその意図せざる帰結」『ソシオロジ』第48巻第2号(第148号)
- ・草津攻 一九八七：「アイデンティティの社会学」『思想』11月号、pp108-142
- ・Lifton, R. J. 1967 : *Boundaries : Psychological Man in Revolution* (＝一九七一、外林大作訳『誰が生き残るか：プロテウスの人間』誠信書房)
- ・正高信男 二〇〇二：『父親力：母子密着型子育てからの脱出』中央公論新社
- ・—— 二〇〇三：『ケータイを持ったサル：「人間らしさ」の崩壊』中央公論新社
- ・町沢静夫 一九九二：『成熟できない若者たち』講談社
- ・道下裕史 二〇〇一：『エグゼクティブフリーター——現実をおそれない自分らしい生き方』ワニブックス
- ・三浦展 二〇〇五：『仕事をしなければ、自分はみつからない。：フリーター世代の生きる道』晶文社
- ・長山靖生 二〇〇三：『若者はなぜ「決められない」か』筑摩書房
- ・日本労働研究機構 二〇〇〇 a：『調査研究報告書 フリーターの意識と実態：97人のヒアリング結果より』日本労働研究機構
- ・—— 二〇〇〇 b：『進路決定をめぐる高校生の意識と行動：高卒「フリーター」増加の実態と背景』日本労働研究機構
- ・小此木啓吾 一九七八：『モラトリアム人間の時代』中央公論社
- ・Rousseau, J. J 1762 : *Emile ou de l'education*. (＝一九六二、今野一雄訳『エミール』岩波書店)
- ・清水将之 一九八三：『青い鳥症候群：偏差値エリートの末路』弘文堂
- ・下村英雄 二〇〇〇：「フリーターの職業意識」日本労働研究機構編『調査研究報告書 フリーターの意識と実態：97人のヒアリング結果より』日本労働研究機構
- ・—— 二〇〇二：「フリーターの職業意識とその形成過程——「やりたいこと」志向の虚実——」小杉礼子編『自由の代償／フリーター』日本労働研究機構
- ・塩原勉 一九七一：「青年問題への視角」『社会学評論』22-2、pp2-5
- ・Taylor, C. 1991 : *The Ethics of Authenticity*. (＝二〇〇四、田中智彦訳『「ほんもの」という倫理：近代とその不安』産業図書)
- ・Trilling, L. 1972 : *Sincerity and Authenticity*. (＝一九七六、野島秀勝訳『〈誠実〉と〈ほんもの〉：近代自我の確立と崩壊』筑摩書房)